菅家 洋子（かんけ ようこ）

オオマタの稲作が消滅

2022 年、オオマタ集落では、水田稲作が消えた。

集落の田は、一軒の農家さんに委託をして米作りをしてもらっていた。その方が作業を継続することが難しくなり、家の田が二枚ほど戻ってくることになった。ただ置いていては荒れるだけなので、何か植えようかとその後の利用を家族で話し合った。だけど問題は、戻ってきた田をどうするかだけではないことを、春になって知ることになる。

かすみ草を中心とした切り花を栽培する農家である我が家。潅水（水やり）に、動力やチューブを使って効率化する方法もあるなか、一株ずつジョウロで手潅水するのが基本スタイルになっている。時間もかかるし労力もいるけれど、ひとつひとつの植物の状態を観察するという目的がある。その時に使う水は、近くを流れている水田用の水路から汲んでいた。その時になるまで気が付かなかった。水は家から汲んでこなくてはならなくなった。水田がなくなれば、水路もなくなる。

稲刈りのころなるとその農家さんから「もみ殻」をもらって、「燻炭（くんたん）」を作っていた。「もみ殻燻炭」には土壌改良効果があるので土に混ぜたり、植えた苗の株元を覆って泥はねを防いだり、春先に雪上に撒いて雪解けを促すために使っている。前の年に多めに作っておいたので数年分は保存してあるけれど、大切に使っていてもいつかはなくなってしまう。水田がなくなれば、もみ殻燻炭もなくなる。

そしてその時期には、「藁」も分けてもらっていた。藁は、栽培している繊維植物「からむし」に必要なもの。春、からむしの芽を焼いた後に、肥料になる灰を押さえ、雑草を防ぐために畑全体に藁を広げる。以前、「米作りをやめて藁がなくなったから、代わりにカヤ（ススキ）を使っている」という話を聞いたことを思い出した。我が家はどうするか。小野川集落に住む親戚の計らいで稲わらロールを分けてもらえることになり、会津美里町まで取りに行った。これはまだ、暫定的な方法でしかない。水田がなくなれば、藁もなくなる。

集落での米作りが終わるとき、ただ水田という存在がなくなるだけでなく、その余波は想像以上に様々あった。そして、オオマタ集落で続いてきた約 300 年の稲作の歴史が途絶えたということは、もしかしてとても大きな出来事ではないかということにやっと考えが及んだ。集落の運営も、景観も、環境も、米を栽培し収量を増やすことが中心に据えられ、形作られてきたのだとしたら、これからオオマタにはどんな変化が訪れるのだろう。これまで田んぼに生息していた生きもの、飛来していた鳥なども、もうオオマタにはいなくなるのだろうか。反対に、米作りがなくなったことで「戻ってくるもの」はあったりするのだろうか。これから現れる繊細な変化をどこまで感じ取ることができるか分からないけれど、観察していきたいと思う。